

くらしと協同の本

名和又介・庄司俊作・井上史 編

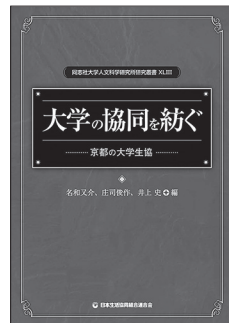
『大学の協同を紡ぐ：京都の大学生協』

【BookData】

発行 コープ出版 2012 年 5 月 480 ページ

値段 2,000 円 + 税

ISBN : 978-4-8733-2310-7



評者：庄司 興吉（全国大学生生活協同組合連合会 会長理事・東京大学名誉教授）

自分の、これまでの社会学的研究の成果、および大学生協との関わりに照らして、日本の大学生協のもつ意味について、考えつづけている。2012 年は国際協同組合年なので、とりわけそういう機会が多い。その文脈で、本書のもつ意味は大きいと思う。

本書は研究編と証言編とからなり、それぞれに 10 本の論文と、19 の証言が収められている。「はしがき」で庄司俊作氏が述べているように、京都の大学生協を中心にした研究と証言であり、同志社生協を中心にした考察や観察である。

本書の第一の特徴は、生協との関連で、生協の立場あるいは視点から、学生生活の変遷にアプローチしていることであろうか。たとえば第 1 章の庄司論文では、安保闘争後 1960 年代の学生生活が大学生協連の学生生活実態調査をもとにとらえられ、そのもとで 1957 年に創立された同志社生協の発展が述べられ、それが 60 年代末から 70 年代初の大学紛争で大きな影響を受けたのち、打撃からなかなか立ち直れなかった理由が分析されている。「歴史性としての費用構造問題」と「現代性としての体質問題」という指摘は、ある意味で今日の大学生協にも当てはまりそうな気がする。

バブル期からポストバブル期への学生生活の

変化を、学生生活実態調査を用いた消費動向の分析で追究した久保建夫氏の第 2 章も、興味深い。大学生活の重点が、1980 年代、90 年代までは「豊かな人間関係」だったが、90 年代末から「勉強第一」がトップの座にのし上がり、「何事もほどほどに」がそのあとを追うようになったというのも、バブル崩壊後の社会状況の厳しさを物語っているのであろう。そのなかで、生協が何を期待され、課題としてきたのかは、今日にまでつながっている話である。

久保氏と名和又介氏、三宅智己氏の第 3 章は、こうした分析を京都、滋賀、奈良に広げ、学生生活の重点がこのようになってきたことをふまえて、政治に関心をもったり、世界で活躍したり、地域社会に貢献したりする意欲が、学生のあいだで弱まってきていることを指摘している。消費者運動から考えた大学生協にかんする原山浩介氏の第 4 章も、短いながら重要である。「消費者」という「擬制の階級」が効かなくなってくるなかで、民間業者が生協のやり方に近づいてきているのにたいして、あらためて生協とはなにかが問われているという問題提起は、まさに今日の状況のポイントを突くものであろう。

第 5 章から第 10 章までは、同志社生協の歴史にかんする論考である。井上史、及川英二郎、

名和又介、小枝弘和、大鉢忠の5氏によるこれらの論考は、110年以上も前の1898年に日本最初の大学生協（「学生消費組合」）として発足した同志社生協が、戦前の歴史をふまえて戦後の混乱期を乗り越え、1957年に「同志社大学消費生活協同組合」として再発足して、その後の激動の歴史を生き抜いてきた経過を描いている。

戦前からの歴史をたどった井上氏の論考に加えて、1950年代から60年代にかけての同志社生協が、値上げ問題への対応を中心に地域生協に乗り出していった過程を描いた及川氏の論考、70年代から80年代にかけての同生協が、「福武所感」などにインパクトを受けて、「学園に広く深く根ざした大学生協づくり」に取り組んでいった過程を分析した井上氏の論考、同生協書評誌『邂逅めぐりあい』をつうじて70年代から80年代にかけて展開された読書推進運動と、全国的なこの運動のなかで大学生協が果たした役割を浮き彫りにした名和氏の論考、同生協の前身の初期に帰って購買運動の経過を追って安部磯雄とその後継者たちの役割を描いた小枝氏の論考、阿部の日記の翻刻から協同組合運動の背景にあったキリスト教や社会主義の性格を描き出した大鉢氏の論考と、一つひとつが興味深い。

こうした諸論考をつうじて、安部磯雄から大学生協連の初代会長嶋田啓一郎氏にいたるまでの流れを感じ取ることができる喜びは、現会長としての私だけのものではありえないであろう。

証言編では、同志社大学にかぎらず京都地域の諸大学生協についての、さまざまな思い出や意見が語られている。それらの一つひとつにふれているだけの余裕はないが、それらを通読させていただくことをつうじて、私がますます感じるようになった問題性について、最後にふれさせていただこう。10本の論文にも伏在していたことなのだが、それは端的に言って、生協とは何かを考える文脈の自覚ということである。

論文の著者たちも証言者たちも、大学生協（および生協一般）のことを熱心に考え、多大の努

力を払ってきている。そのことに、私は頭が下がるばかりである。しかし、なにか文脈がはっきりしない。一世紀以上にもわたる生協の歴史、戦後の同志社大学生協からだけをとってももう半世紀以上にもなる生協の歴史—これを私たちはどんな文脈のもとで考えていけば良いのであろうか。

戦前はともかく戦後半世紀ほどのあいだ、私たちの多くは、生協や協同組合運動よりは学生運動や労働運動を中心に社会を変えることを考えていた。それらがふるわなくなり、20世紀社会主義が崩壊したり、変質したりしたあと、あらためて生協運動や協同組合運動が見直されてきているが、それはなぜなのであろうか。

社会学的研究や大学生協への関与をつうじて、私は、あらためて世界中の市民社会化という自覚を強めている。普通選挙の普及をつうじて、労働者たちが市民になり、学生も市民か市民の卵になったのである。市民たちは、選挙制度を、できるだけ正確に意見の分布を反映するものにすることをつうじて、できるだけ有効な市民政府をつくっていくと同時に、大金持ちや中小金持ちだけでなく、資本金のない普通の市民も、いや普通の市民こそが、自分たちのための、利益のみにとらわれない事業を起こし、社会のますます多くの部分を支えていかななくてはならない。そういう事業こそ、じつは、ロッヂデールから始まった生協運動と協同組合運動なのではないのであろうか。

そういう自覚を基礎に、私は、京都コンソーシアムの「協同組合論」で講義し、その内容を論文にまとめた。そこで述べたような文脈のうえに置くと、上にレビューした論文や証言から、もっともっと多くの意義を引き出せそうな気がする。そういうことを、これからも個別生協史や地域生協史について、機会あるごとにやっていきたいと思う。

本書はそういう意欲をあらためてかき立ててくれる刺激的な好著のひとつである。